



わたしと和讃Ⅱ

妻からもらつた和讃

次の和讃は昔から前述の「三帖和讃」、其のほかに「帖外和讃」（じようがいわさん）とよばれて合計520首余りのほかの九首のご和讃があります。作者不確定とされている九首のうちの一首です。

晩年の親鸞さまは、今まで（七十六歳ごろから八十八歳）に作った和讃に音符をつけたり送り仮名を振ったりなど加筆訂正吟味修正、または編纂作業を繰り返しました。それは「ひとへに文字の心も知らず石・瓦・つぶてことくなる田舎人」と一緒に、唱え易く、ころえやすからんために思案を加え骨を折ったのであろう。いまはその帖外和讃九首うちの一首。

超世ノ悲願キキシヨリ ワレラハ生死ノ凡夫カワ 有漏（うろ）ノ穢身ハカワラネド
ココロハ淨土ニアソブナリ

（語訳）

「超世の悲願」によらいさまの世の常識を超えたお慈悲の願い。ご本願の事です。

わたしにとって真実の如来様は「いのちと光り極みなきほとけ」さまです。いつでもどこでも寄り添い、往生を願い呼びかけて下さる「仏様」。「生死の凡夫かは」。生死流転をくりかえす凡夫。いつもいつも死んでも生まれ変わつても。小さな欲望の世界から抜け

出せない世界にいるあなた。「かは」かは疑か。そうに違いない」、生死流転の凡夫なのだろうか。まさしくそうにちがいない（その証拠に）。

「有漏」は無漏に対することばで「煩惱」

（自己本位にまみれた穢れた身）。癌というどうしてみようもない病魔に犯され死に行く身でありながら、いろいろな欲望にさいなまされて日々煩惱から離れられない私が今もここにいる。（これが生死流転の凡夫のなによりの証拠）

そのわたしに働きかけて下さる「南無阿弥陀仏のお呼び声に呼び覚まされると田覓めたとき」「こころは淨土に遊ぶなり」煩惱にいきていいるこのままこの世から「こころは淨土に遊ぶ」のです。

妻が嫁いできてからしばらくしてから妻の口からこのご和讃を聞いて驚きました。このご和讃は里の母が常時唱えていたご和讃と言ふことでした。

妻は死の三ヶ月前に出石病院に転院して来ました。里の島根に帰りたい、出石の寺の近くもう里島根のことは諦めたようでした。

病院の隣りの寺のお勤めの鐘の音は聞こえます。風向きによっては自坊の鐘の音も聞こえたでしょう。夫が大概、寝泊まりして付き添っていました。ときおりその夫に、有名な

「歎異抄」第九条の唯念坊と親鸞さまのやり取りのところを何度も聞いて涙しておりました。また自分で「超世の悲願キキシヨリ」の和讃を唱えて「里の瑞泉寺に帰つてゐる」とも申しておりました

（前住職）

観桜会

募集

四月十二日（土曜日）

第一部 グランドゴルフ大会

時間 午後二時より

場所 いきいきドーム

（出石町弘原）

第二部 観桜会

時間 午後五時より

場所 勝林寺本堂

申込 いずれも地区仏婦評議員さんにお申し込

みください。

出石組念佛奉仕団

本山にお参りし、軽い奉仕作業をします

五月二十六、二十七日（月、火）

参加費 20,000円

（宿泊、食事、お供えなど含む）

* 参加を希望されます方は、四月二十日までに寺までお知らせください。

納骨研修旅行

六月二十一、二十二日（土、日）

行先 本山、大谷本廟、小豆島方面
費用 三万円程度
申込 直接、寺にお申し込みください。



五日（土）川崎宅 二三回忌

平野睦美宅 忌明法要
出石組 組会

出石・但東仏教会 役員会

六日（日）光頭寺 永代経
観桜会 打ち合わせ

九日（水）湯口真由美宅 忌明法要
観桜会

五日（土）川崎宅 二三回忌

平野睦美宅 忌明法要
出石組 組会

出石・但東仏教会 役員会

六日（日）光頭寺 永代経
観桜会 打ち合わせ

九日（水）湯口真由美宅 忌明法要
観桜会

五日（土）川崎宅 二三回忌

平野睦美宅 忌明法要
出石組 組会

出石・但東仏教会 役員会

六日（日）光頭寺 永代経
観桜会 打ち合わせ

九日（水）湯口真由美宅 忌明法要
観桜会

五日（土）川崎宅 二三回忌

平野睦美宅 忌明法要
出石組 組会

出石・但東仏教会 役員会

六日（日）光頭寺 永代経
観桜会 打ち合わせ

九日（水）湯口真由美宅 忌明法要
観桜会

五日（土）川崎宅 二三回忌

平野睦美宅 忌明法要
出石組 組会

出石・但東仏教会 役員会

六日（日）光頭寺 永代経
観桜会 打ち合わせ

九日（水）湯口真由美宅 忌明法要
観桜会

五日（土）川崎宅 二三回忌

平野睦美宅 忌明法要
出石組 組会

出石・但東仏教会 役員会

六日（日）光頭寺 永代経
観桜会 打ち合わせ

九日（水）湯口真由美宅 忌明法要
観桜会

五日（土）川崎宅 二三回忌

平野睦美宅 忌明法要
出石組 組会

出石・但東仏教会 役員会

六日（日）光頭寺 永代経
観桜会 打ち合わせ

九日（水）湯口真由美宅 忌明法要
観桜会

五日（土）川崎宅 二三回忌

平野睦美宅 忌明法要
出石組 組会

出石・但東仏教会 役員会

六日（日）光頭寺 永代経
観桜会 打ち合わせ

九日（水）湯口真由美宅 忌明法要
観桜会

五日（土）川崎宅 二三回忌

平野睦美宅 忌明法要
出石組 組会

出石・但東仏教会 役員会

六日（日）光頭寺 永代経
観桜会 打ち合わせ

九日（水）湯口真由美宅 忌明法要
観桜会

五日（土）川崎宅 二三回忌

平野睦美宅 忌明法要
出石組 組会

出石・但東仏教会 役員会

六日（日）光頭寺 永代経
観桜会 打ち合わせ

九日（水）湯口真由美宅 忌明法要
観桜会

五日（土）川崎宅 二三回忌

平野睦美宅 忌明法要
出石組 組会

出石・但東仏教会 役員会

六日（日）光頭寺 永代経
観桜会 打ち合わせ

九日（水）湯口真由美宅 忌明法要
観桜会

五日（土）川崎宅 二三回忌

平野睦美宅 忌明法要
出石組 組会

出石・但東仏教会 役員会

六日（日）光頭寺 永代経
観桜会 打ち合わせ

九日（水）湯口真由美宅 忌明法要
観桜会

五日（土）川崎宅 二三回忌

平野睦美宅 忌明法要
出石組 組会

出石・但東仏教会 役員会

六日（日）光頭寺 永代経
観桜会 打ち合わせ

九日（水）湯口真由美宅 忌明法要
観桜会

五日（土）川崎宅 二三回忌

平野睦美宅 忌明法要
出石組 組会

出石・但東仏教会 役員会

六日（日）光頭寺 永代経
観桜会 打ち合わせ

九日（水）湯口真由美宅 忌明法要
観桜会

五日（土）川崎宅 二三回忌

平野睦美宅 忌明法要
出石組 組会

出石・但東仏教会 役員会

六日（日）光頭寺 永代経
観桜会 打ち合わせ

九日（水）湯口真由美宅 忌明法要
観桜会

五日（土）川崎宅 二三回忌

平野睦美宅 忌明法要
出石組 組会

出石・但東仏教会 役員会

六日（日）光頭寺 永代経
観桜会 打ち合わせ

九日（水）湯口真由美宅 忌明法要
観桜会

五日（土）川崎宅 二三回忌

平野睦美宅 忌明法要
出石組 組会

出石・但東仏教会 役員会

六日（日）光頭寺 永代経
観桜会 打ち合わせ

九日（水）湯口真由美宅 忌明法要
観桜会

五日（土）川崎宅 二三回忌

平野睦美宅 忌明法要
出石組 組会

出石・但東仏教会 役員会

六日（日）光頭寺 永代経
観桜会 打ち合わせ

九日（水）湯口真由美宅 忌明法要
観桜会

五日（土）川崎宅 二三回忌

平野睦美宅 忌明法要
出石組 組会

出石・但東仏教会 役員会

六日（日）光頭寺 永代経
観桜会 打ち合わせ

九日（水）湯口真由美宅 忌明法要
観桜会

五日（土）川崎宅 二三回忌

平野睦美宅 忌明法要
出石組 組会

出石・但東仏教会 役員会

六日（日）光頭寺 永代経
観桜会 打ち合わせ

九日（水）湯口真由美宅 忌明法要
観桜会

五日（土）川崎宅 二三回忌

平野睦美宅 忌明法要
出石組 組会

出石・但東仏教会 役員会

六日（日）光頭寺 永代経
観桜会 打ち合わせ

九日（水）湯口真由美宅 忌明法要
観桜会

五日（土）川崎宅 二三回忌

平野睦美宅 忌明法要
出石組 組会

出石・但東仏教会 役員会

六日（日）光頭寺 永代経
観桜会 打ち合わせ

九日（水）湯口真由美宅 忌明法要
観桜会

五日（土）川崎宅 二三回忌

平野睦美宅 忌明法要
出石組 組会

出石・但東仏教会 役員会

六日（日）光頭寺 永代経
観桜会 打ち合わせ

九日（水）湯口真由美宅 忌明法要
観桜会

五日（土）川崎宅 二三回忌

平野睦美宅 忌明法要
出石組 組会

出石・但東仏教会 役員会

六日（日）光頭寺 永代経
観桜会 打ち合わせ

九日（水）湯口真由美宅 忌明法要
観桜会

五日（土）川崎宅 二三回忌

平野睦美宅 忌明法要
出石組 組会

出石・但東仏教会 役員会

六日（日）光頭寺 永代経
観桜

極重惡人唯稱仏 我亦在彼攝取中
煩惱障眼雖不見 大悲無倦常照我

極重の惡人、唯だ、仏を称すべし。
私も亦、彼の攝取のうちにあり。



一切は縁におひて生まれ

どすん

人の終焉(シヨウエン)（死に際）の、いみじかりし（立派だった）ことなど、人の語(タタ)るを聞くに、ただ「静かにして乱れず」といわば、（それだけで）ここにくかるべき

（感心させられるはずなのに）、（世間の）愚かな人は、わざと不思議な（異様な）すぐたをつけて（つけ加えて）、その人の言いしたことばも振る舞い（態度）も、おのれの（こちら側の）好む方（好きなよう）に褒めなす（作って褒める）のは、（亡くなつた）その人の本意にはあらずや（本意ではないのではないか）と覺ゆれ（つい思えてしまう）。

この（人の臨終）の一大事は、権化(ミスケ)（神のまへ變わら）の人も（自分で）、定むべからず（決めるとは出来ない）。博学（學問を究めた）の士（立派なお方）も、（自分で）はかるべからず（勝手に決められません）。（ましてや）人の（他人の）見聞く（うわさばなし）には依る（耳を傾けては）べからず（なりません）。

平安・鎌倉時代。「臨終行儀(らんじゅうぎょうぎ)」といって、臨終の人は仏像の手から延べられた七色の糸を持ち、口に念仏を唱えて、専心に仏・菩薩の「來迎(ライヨウ)」を信じ祈るのでした（「來迎往生」(ライヨウ・オウジヨウ)）。

其の側(きが)で親族知人も、経文を唱え念佛して応援しました。そうして始めて來迎(ライヨウ)のほとけに抱かれて淨土往生ができると考えられていました。

しかし、比叡山の源信僧都(げんしん・そうず)とい

う高僧は、如来さまのまことの心、衆生の往生を念ずる『本願』のところを、正当にうけとめ、それを次に源空上人法然そして親鸞聖人へと伝えて下さいました。親鸞さまはこの伝統のおしえを「正信偈」のなかで次ぎのように伝えて下さっています。

わたしのような、いかにしても救われようのない罪業深重の悪人は、お互、「南無阿弥陀仏」とお念仏を申すしかないのです。なぜかといって、如来さまは十劫というばかり知れない昔から「十方衆生を救わねばわたしは仏とは呼ばれません」と誓つて阿弥陀如来となられました。その阿弥陀さまの誓いの呼び声が「南無阿弥陀仏」というお念仏です。だから今、この私もそのお誓いの呼び声のかに包まれているのです。

狭い小さな、自分でな欲望の目でしかものの見えないこのわたしではあります。この私こそ、如来さまの「本願（かねてから）の願い」のおめあてであり、如来さまは絶え間なくわたしを信じ照らしてくださっていります。これを「他力本願」の教えと言う

煩惱ニマナコサエラレテ 摂取ノ光明ミザレドモ 大悲モノウキコトナクテ ツネニワガミヲ照ラスナリ

『高僧和讃』には

「死の縁、無量」と言います。

どんな死に方をするのか。狂って死ぬか、もがきながら死ぬか。到底、お念佛しながら眠るように息ひきどるというように逝けません。ろくな死によくできない「極重の悪人」であるこのわたしを、はかり知れない遠い昔から、照らしつづけ、願いつづけ、呼びつづけていてくださる南無阿弥陀仏。

どのように考えてみても思つてみても、計らつてみても、所詮、凡夫、悪人の一人よがりの悪あがき。折角、親が南無阿弥陀仏と呼んでいてぐさるのだから、素直にハイと從つて、生き、そして死んでいましょう。

(前住職)

《法話》 宮城 頤(しづか) 「生と死」より

宮城氏の姿勢は、念仏（仏法）に支えられた生き方を求められた生涯だったと思われます。私たちには、不思議な因縁によって生まれ、因縁の中で歳を重ね、どこか病みながら、臨終の一念を迎えるのです。この「生、老、病、死」こそが、私のいのちの姿なのですが、このことを自覚しているでしょうか。親鸞聖人の言葉にも「なごりをしくおもへども、娑婆の縁尽きて、ちからなくしてをはるとき、かの土（淨土）へはまいるべきなり」とあります。ここに「なごりをしくおもへども」とあります。皆さん、最近「なごりおしい」と思えるようなことがあります。最近「なごりおしい」と思えるようになります。つまりましたか。たとえば、遠く都会に住む子や孫が帰省して数日後に戻るといった場合、「なごりおしい」という思いが起こるでしょうか。ほとんどのではないでしょうか。それは、その出会いの生活を当たり前だと思っているからであり、いつでも会えると思っていているからです。私たちの毎日のいのちの営みはすべて「一期一会」なのです。毎日の営みは、私たちの計らいを超えた不思議な因縁によるものなのです。それを自覚してこそ、いのちとその出会いを大切にすることができるのです。そのような毎日の生活を送つてこそ「なごりおしい」という気持ちが起るのでしょうか。

さて、三月は、卒業（ゴール）の報告をさせていただきましたので、今月は、スタートの報告をさせていただきます。後継住職（長男）は、四月一日より、大阪東淀川区の社会福祉協議会でお仕事をさせていただきました。また、長女は、神戸の大学で薬剤師を目指して勉強させていただきました。二人とも、この数か月、つまずいたり転んだり、またそこから起きあがることを経験して、ようやくたどり着いた値打ちのあるスタートラインです。おかげで、急にたくましくなったような気がします。とはいっても、ここからが本番です。しっかりと勉強して、社会に恩返しのできる大人を目指して精進してくれることを願う母です。

さあ、こうなると、母もうかうかしていられません。子どもにばかり多くを求め、自分は「おこころ・とはいきません。（したいですけど）そこで、五月六日から、十一日間の得度習礼（僧侶の資格を得るために勉強）を受けることにいたしました。ご門徒の皆さんには、何かじぶん迷惑をおかけすることと思いますが、留守の間の寺への応援お願いたします。（文責 坊守）